

連語から見られる概念メタファーの分析を通して 理解するロシア語の言語的世界観

ヴィヤチェスラヴ・スロヴェエイ

研究課題について

近年サピア・ウォーフの仮説に基づき、言語と文化、又は言語と世界観の相互関係をテーマにした研究が盛んになされるようになってきている。その中でも言語の固有性を追求する文化人類学などの研究が多く、言葉を通じて民族の習慣や社会の構造などを説明しようとする研究が多い。日本においては、土居健郎の『甘えの構造』¹、九鬼周造の『「いき」の構造』²、鈴木孝夫の『日本語と外国語』³、山本七平の『「空気」の研究』⁴、阿部謹也の『「世間」とは何か』⁵、四方田犬彦の『「かわいい」論』⁶などといった数々の書籍が注目を浴びている。つまり、日本人を均一な集団としてとらえ、異文化との比較を通して独自性を論じる研究が多く、このように自民族のアイデンティティーについて活発な議論が交わされている現象は世界に類がないという意見もある。

だが、ロシアでも自民族論は盛んで、ロシア人のメンタリティを扱った書籍の数でいうならば、日本人論研究に負けていないと言える。哲学者でいえばニコライ・ベルジャーエフ(1874 - 1948)の研究などがあり⁷、文学ではフョードル・チュツェフの「Умом Россию не понять」が有名だろう。会話レベルでも自分たちの独自性への執着がよく現れている。例えば、「Что русскому хорошо, то немцу смерть」(ロシア人にとって良い事は、ドイツ人にとって死である)という諺もあれば、「Загадка русской души」(ロシア人の心の謎)という使用頻度が極めて高いフレーズもある。

上記の図書リストからもうかがえるように、文化的独自性を追求する研究は、文法よりも、独自だと思われる特定のことばの分析に集中しているものが多い。そのような語彙は民族の文化に強いかかわりを持って、その文化を凝縮したかのような存在であるとされている。例えば Wierzbicka はそのような語彙を文化的キーワードと名付け、“Some words can be studied as focal points around which entire cultural domains are organized.”¹⁰と語っている。その上で Wierzbicka は同書において、英語、ロシア語、ポーランド語、ドイツ語、日本語それぞれにおける言葉の意味の差異を明らかにする研究を行い、「自由」、「友情」、「母国」、「精神」、「義理」などの概念を挙げながら、意味のずれ、使用頻度、使用場面などによる違いが示されている。

文化的キーワードは他文化に存在しない現象や世界観を表しているため、ほとんどの場合は他言語に正確に翻訳できないとされている。ロシアの文化的キーワードとしては以下のよ

うな言葉がよく挙げられる——авось, душа, правда, истина, простор, заодно, вдруг, судьба, тоска, надрыв, жалость, любовь, сочувствие, удаль...

このようなキーワードは、もちろんロシアの文化を理解するためのキーワードでもあるが、時にはロシアの文学作品を理解するうえでとても重要なキーワードとなる場合もある¹¹。

そもそも「жалость」や「судьба」など上記であげたような抽象的な概念は、翻訳できないどころか、その言語の話者のなかでもまったく同じように理解されていない可能性が十分にあると思われる。その意味の理解に差異があってもおかしくないし、議論や研究の対象になっても不思議ではない。特に類義語の場合、意味の微妙なニュアンスを解明するのが困難で、ネイティブスピーカーでも正しく使い分けるために工夫をしている場合がある。

さらに抽象概念ではほとんど当然のことだが、異なる言語の単語の意味は完全には一致しない場合が多い（辞書には対応する訳語の記載があるが、完全に適切な訳語がないため、無理矢理に載せられているだけである）。なおかつ、抽象的な概念を含む単語だけでなく、どの文化にも存在する具体的な「もの」を指す単語まで、言語ごとに一致しない場合がある。その例として、鈴木孝夫が指摘した英語の「Lip」と日本語の「唇」の意味的なズレが挙げられるだろう¹²。

言語はその話者の世界観の形成に関与するというサピア・ウォーフ仮説が部分的にでも正しければ、文芸作品の翻訳は世界観の問題に関わることになり、如何に単純で、民族性を帯びていない文芸作品を訳す場合においても、そこには異なる文化間の問題が表れるのである。このような状況の中では、ロシア語文学を読もうとしている外国人、またはロシア語から母語へ翻訳しようとしている外国人翻訳者が、いったいどこまで文芸作品の内容が理解でき、どこまで母語で表現できるかという疑問が自然に生じる。

ただし、一般の翻訳はもちろんのこと、文化に敏感な文学の翻訳も実際に行われ、そして読まれているため、ロシア語を翻訳する翻訳者は少しでもロシア語のことばの正しい理解に近づく必要がある。ことばの細かいニュアンスが理解できない単語を辞書で引くのは一般的な方法だが、和露辞典、詳解辞典などには十分な解説がない場合が多い。最近はそのギャップを埋めようと *Новый объяснительный словарь синонимов русского языка*¹³ のような書籍が出てきている。その筆者は鋭い視線でそれぞれのことばの使う場面などを紹介し、今まで指摘されなかった特徴まで突き詰めている。ただし、以下の例でわかるように、ことばの意味は結局ほかのロシア語の類義語やキーワードと思われることばで説明されている。

Наиболее стихийное чувство, являющееся непосредственной реакцией души на чужое страдание, — это жалость.¹⁴

つまり、複雑な文化的な概念（「душа」）を使って、他の概念（「жалость」）を説明するという悪循環に陥り、キーワードの意味をロシア語の枠内でしか理解できないことになる。

そのため、理解しにくい概念を外国人にも正確に伝える方法として、Gottfried Leibniz、

Rene Descartes そして Andrzej Bogusławski の「思考のアルファベット」というアイデアを元に作られた、Wierzbicka と Goddard の自然的・意味的メタ言語 (Natural Semantic Metalanguage, NSM) も注目すべきである。長年、普遍語彙に関する調査を行っている Wierzbicka¹⁵ によれば、すべての言語共通と考えられるコンセプトには「I, YOU, SOMEONE, PEOPLE, BODY, KIND, PART, THIS, THE SAME, ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH/MANY, LITTLE/FEW, GOOD, BAD, BIG, SMALL, THINK, KNOW, WANT, FEEL, SEE, HEAR, SAY」などがある。このような意味素性とされるコンセプトによってあらゆる語彙の意味を構築できると Wierzbicka は主張している。たとえば、母語話者の感覚がないと分かりにくいとされているロシア語の「сочувствие」も、NSM 法で以下のようにロシア語で説明されている¹⁶。

Сочувствие X-а к Y-y; X сочувствует Y-y:

- (a) X испытывает нечто хорошее по отношению к Y-y
- (б) X может представить себя испытывающим то, что испытывает Y
- (в) X может представить себя считающим то, что считает Y
- (г) X считает, что Y-y плохо
- (д) X-y плохо оттого, что плохо Y-y
- (e) X хочет, чтобы Y-y было хорошо

こちらの方法は一部の課題を解決するが、上記二つのアプローチはともに大きな欠点がある。多くは筆者自身の言語感覚またはネイティブのインフォーマントの感覚に基づいて直感的に分析されているため、見落としている部分もあれば、主張の根拠が見えにくい場合がある。さらに、母語で考えて世界を捉えていて、ネイティブの感覚がない人は同じ手法を使って、ことばの細かいニュアンスを探るのは困難であろう。

管見によれば、NSM 法に加え、概念メタファーを研究する認知言語学の成果を視野に入れることで、その問題が解決できる。概念メタファーは、思考と概念の構造において大事な役割を果たし、人間の抽象的な概念能力は具体的な認知機構からのメタファー的拡張によって作られているという Lakoff のアイデアを踏まえるならば、概念メタファーを分析することによって、抽象的な語彙の意味が解明できるだろう。なお、下記で示すように「火」や「川」といった具体的な（五感で知覚できる）語彙の用法においても概念メタファーが見られるので、この手法はロシア語とそこに現れるロシア世界観の理解への可能性を拓く一助となるだろう。

分析の手順

1. まずロシア語の言語コーパス¹⁷や 連語辞書¹⁸、Google の言語分析ツール¹⁹などを使用し、特定の言葉との組み合わせで用いられる頻度が高い連語を抽出する。例えば、ロシア語

の「огонь」の場合、以下のような連語 (collocations) が挙げられる。

“Огонь” (火) が (動詞)

согревать (暖める (完了)), греть (暖める (不完了)), гореть (燃える)、
 гаснуть (消える)、распространяться (広がる)、разгораться (燃え上がる)、
 полыхать (揺らめく)、освещать (照らす)、озарять (輝かす)、сиять (光る)、
 мерцать (煌く)、пламенеть (炎を上げて燃える)、теплиться (かすかに燃え
 える)、издавать свет (光を出す)、жечься (やけどさせる)、излучать свет (光を出
 す)、светить (光る)、печь (やけどさせる)、просочиться (浸透する)、трещать
 (パチパチ音を立てる)、пожирать (食ら食う)、убивать (殺す)、метнуться
 (サッと動く)、лизнуть (何かを舐める)、заснуть (寝る)、пробудиться (起
 きる)、утихнуть (静かになる、落ち着く)、охватить (何かを抱き締める)、
 есть (食べる)、присмиреть (大人しくなる、退く)、накиннуться на кого-то
 (誰かに襲いかける)、шипеть (シュッと音を立てる)、разъяриться (激怒す
 る)、бояться (воды) (怖がる)、рыскать (駆けずり回る)、перепрыгивать
 (飛び越える)、доходить до... (…まで行く)、перекинуться на (次のものを
 攻撃する)、проглотить (呑み込む)、бесноваться (暴れる)、плясать (踊
 る)、юлить (せかせか動き回る)、терзать (引き裂く)、реветь (吠える)、
 проникать (入り込む)、бушевать (荒れ狂う)、взвиться (上に飛ぶ、はた
 めく)、ползти (這う)、пыхнуть (в лицо) (息を出す (顔に))、тухнуть (от
 тихий) (落ち着く、消える)、вспыхнуть (от пыхтеть, дышать) (息を吸う、
 燃え上がる)、полыхать (от полах, переполох, и т.д.) (燃えさかる、あかあか
 と燃える、あわてる)、биться в печке (биться в клетке) (慌てて籠などを出よ
 うとする)、обглодать что-то (ガリガリかじる)

“Ogon” (火) を (動詞)

гасить (消す)、зажечь (つける)、увеличить (増やす)、хранить (守る)、
 тушить (стар. успакаивать) (現在は「消化する」という意味しかないが、語源は
 「静か」、つまり動詞の場合は「静かにさせる」、「落ち着かせる」)、запалить (燃
 やす、点火する)、поддерживать (保つ)、предать огню (直訳「火に渡す」、
 意味「火にかける」、「火で燃やす」)、бороться с огнем (直訳:「火と戦う」)、
 учуять (感じる=けだもの、動物、危険性を伴う場合に用いる)、добыть (直
 訳「獲物を狩る」、意味「火をたく」、「火をおこす」)、приручить (直訳「飼
 い慣らす」、意味は「火を使えるようにする」)、подчинить (直訳: ~を征服す
 る、圧倒させる、意味「火をコントロールする」)、развести (直訳「(家畜
 を)飼う、繁殖する」、意味「たき火をする」)、кормить (直訳:「餌をあげる、

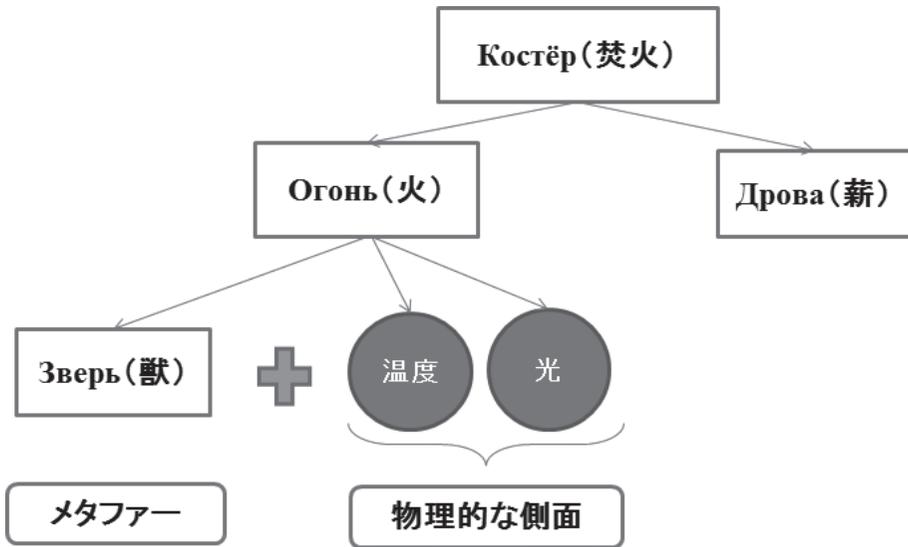
何かを食べさせる」、意味「火に薪や他の燃料をくべる」、*утихомирить* (直訳「静かにさせる、子どもなどをなだめる」、意味「火を落とす、火を小さくする」)

“Ogon” (火) + 形容詞

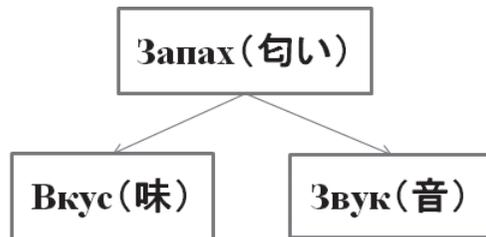
горячий (熱い)、*жаркий* (暑い)、*маленький* (小さい)、*большой* (大きい)、*ясный* (明るい)、*ненасытный* (直訳「強欲な、〔食欲で〕飽くことを知らない」)、*голодный* (空腹な、飢えた)、*кровожадный* (語源:「血に飢えた」、意味「激しい」)、*хищный* (肉食の)、*разъярившийся, разъярённый* (怒り狂った)、*сильный* (強い)、*беспощадный* (容赦しない、冷酷な)、*живой* (直訳「生きている」、意味「覆いのない暖炉の」火)、*свирепый* (激怒した、怒り狂った)、*веселый* (いきいきとした、元気な)、*слабый* (弱い)

2. 次にメタファー的な連語(太字となっている)を選別する。上記で太字にした連語は、詩のみに用いるようないわゆる詩的(修辭的)な表現ではなく、ロシア語話者がほとんど意識せずに日常会話あるいは新聞やテレビなどでよく使うものである。抽出された連語はその用法(意味)のソースドメインを探す必要がある。言葉によっては二つ以上のソースドメインが存在するが、「огонь」の場合は一つで、そのソースは「зверь」(日本語:獣、動物)であると簡単にわかる。太字となっているメタファー的な単語は「зверь」という単語にもつけられて、「зверь」の連語でもある。それ以外のもの(太字となっていない連語)は概念メタファーではなく、直接火の物理的な特徴を説明している(熱さ/暑さ、明るさ、色など)。ただし、現在のロシア語話者から見ると、メタファー的ではない連語の中にも、元々はメタファーとして生まれたものがある。上記の「火」の例を見れば、「тушить」(火を消す)、「жаркий」、「жар」(熱い、暑さ)といった連語があるが、その語源を語源辞書で調べれば、「тушить」(火を消す)は「тихий」(静か、落ち着かせる)という単語に由来し、「жаркий」、「жар」(熱い、暑さ)は「ярый」(激しい、怒り)という単語に由来する。つまり、このような語源は上記のソースドメイン(「獣」)の説を裏付けるものである。

複雑な概念は、よりシンプルな(分かりやすい)単位によって構築されるため、その全体図は樹形図として表示できる。ロシア語の「костёр」(たき火)の使用頻度の高い連語を分析すれば、その概念はおそらく以下のようなソースドメインからなっていると分かる。



同じ手法を使えば、ロシア人にとって「匂い」とは、「味」と「音」の組み合わせとして理解されていることが分かる。（「сладкий, горький, вкусный, учуять, слышать, прилетел, стоит など」）



連語の分析は、ロシア語ネイティブにもわかりにくい類義語の違いを解明するにも有効であると思われる。例えば、ロシア語の「жалость」, 「сочувствие」(情け、同情)という類義語を考えてみよう。これらの類義語はさまざまな視点から研究²⁰されているが、メタファーの連語の分析から見えてくる違いを洗い出して、その結果を先行研究と照らし合わせてみよう。

まずは上記で述べたように、言語コーパスなどを使ってそれぞれのことばの使用頻度の高い連語のリストを作る。

“Жалость” (同情) が (動詞)

пробудиться (в сердце) (目覚める、活気づく)、шеvelьнуться (в сердце) (ゆれる、活気づく、うごめく)、трогать (душу) (触れる、さわる、かまう、感動させる)、накатиться на кого-то (転がってきてぶつかる)、обуревать кого-то ((意欲に) 燃える)、разъедать (душу) (破壊する、破滅的影響を与える)、раздирать (引

き裂く、分裂させる)、поселиться (в ком-то) (生ずる、居座る)、уколоть (сердце) (傷つける)、охватить (包む、とりこにする、支配する)、изводить кого-то (やつつける、苦しめる)、славить сердце (弱る)、вырваться (振り切る、抜け出す)、налететь (ぶつかる、遭遇する)、накатиться (覆いかぶさる)、терзать (苦しめる、悩ます)、приходить (達する)、уходить (疲れ果てさせる)、нахлынуть (込み上げる)、залить кого-то (支配する、とらえる)、забирает (とらわれる)、разобрать кого-то (とらえる、虜にする)、проникать (入り込む、広まる)、взять (кого-то) (とらえる、支配する)、сотрясать (кого-то) (感動させる)、мучать (кого-то) (悩ます、苦しめる)

“Жалость” (同情) を (動詞)

подавить (抑える)、вызывать (чем-то) (呼び起こす)、вызвать (в ком-то) (惹き起こす)、испытывать (いだく、感じる)、пробудить (奮い立たせる)、выказывать (現わす)、проявлять (現わす、発揮する)、изобразить (表現する)、рождать (生む)、иметь (持つ)、бить на (жалость) (打つ)、привести в (жалость) (起こす)、давить на (押す、締めつける、抑える)、отогнать (撃退する)、отринуть (拒否する、はねつける)、возиметь (感じ始める)、преодолевать (抑える、こらえる)、не ведать (感じない)、почувствовать (おぼえる、抱く、感じる)、чувствовать (感じる、直感する)、ощутить (感ずる、実感する)、побороть в себе (克服する、乗り越える)

“Жалость” (同情) + 形容詞

материнская (母性的な)、беспредельная (果てしない)、глубокая (奥深い)、искренняя (誠意ある)、неприкрытая (剥き出しの)、горячая (熱い)、острая (鋭敏な)、горькая (痛烈な)、огромная (絶大な)、щемящая (重苦しい)、глубинная (深層の)、слабая (希薄な)、сильная (強い)、подлинная (正真の)、неосознанная (無意識の)、большая (偉大な)、обильная (豊かな)、небольшая (僅かな)、брезгливая (潔癖な)、слепая (盲目的な)、мучительная (切ない)、природная (自然の)、восторженная (熱狂的な)、постыдная (浅ましい)、нестерпимая (耐え難い)、неодолимая (克服しがたい)、гадливая (嫌悪に満ちた)、плохо скрытая (不完全に隠された)

次は「Сочувствие」の使用頻度の高い連語を以下のように抽出する。

“Сочувствие” (同情) が (動詞)

пропадать (消失する)、возникать (起こる)、есть (в ком-то) (ある)、испаряться

(消える)、pronзать (突き抜く)、появиться (生じる)、усиливаться (強まる)

“Сочувствие” (同情) を (動詞)

вызвать (в ком-то) (呼び起こす)、испытывать (試みる)、пробудить (起こす)、выказывать (現わす)、проявлять (発する)、изобразить (描写する)、рождать (生む)、иметь (持つ)、выражать (現わす)、встречать (в ком-то) (受け入れる)、надеяться (на) (期待する)、проявить (現わす)、иметь (чье-то...) (持つ)、завоевать (себе) (得る)、возбуждать (引き起こす)、найти (в ком-то) (見出す)、искать (探す)、рассчитывать на (期待する)、уповать на (期待する)、утратить (喪失する)、отбросить (捨てる)、принять (受け入れる)、отвергнуть (拒否する、拒絶する)、претендовать (на) (要求する、自任する)、получать (手に入れる)、опираться на (よりかかる)、играть на (к кому-то) (果たす)

“Сочувствие” (同情) + 形容詞

материнское (母性的な)、беспредельное (果てしない)、глубокое (奥深い)、искреннее (誠意ある)、неприкрытое (剥き出しの)、горячее (熱い)、острое (鋭敏な)、горькое (痛烈な)、огромное (絶大な)、щемящее (重苦しい)、глубинное (深層の)、слабое (希薄な)、сильное (強い)、подлинное (正真の)、гарантированное (確実な)、благородное (高潔な)、встречное (反対の)、невольное (本能的な、不本意の)、дружественное (友好的な)、деланное (人為的な)、пассивное (受動的な)、полное (十分な)、всеобщее (普遍的な)、настоящее (真の)、взаимное (相互の)、безусловное (無条件の)、всяческое (ありとあらゆる)

上記のリストから分かるように類義語である「Сочувствие」と「Жалость」の連語の中には当然ながら共通しているものがあるが、異なる連語を見つければ、単語の意味の違いにたどり着くと思われる。その結果を以下のようにまとめた。

「сочувствие」に使えるが、「жалость」とは使えない、あるいは不自然に聞こえる連語。

名詞 + を : 「выражать, встречать в ком-то, надеяться на ..., проявить, иметь чье-то сочувствие, завоевать себе, найти (в ком-то), искать, рассчитывать на, уповать на, утратить ... к, отбросить, примите наше ..., отвергнуть любое/всякое, претендовать на, получать, опираться на」

名詞 + 形容詞 : 「гарантированное, благородное, встречное, невольное, дружественное, деланное, пассивное, полное, всеобщее, настоящее, взаимное, безусловное, всяческое」

上記で抽出した単語を分析すると「сочувствие」のソースドメインには「жалость」のソースドメインに入っていない「поддержка」（サポート、応援）という概念（単語）が入っていることが分かる。上記の連語はすべて「поддержка」の連語でもあり、「помощь」や「Содействие」などの言葉とは部分的にしか使えない。

この結果は Levontina の以下の説明²¹と合致している。

(В отличие от жалости) Сочувствие и участие возможно только по отношению к людям, т. к. эти чувства представляют собой не просто непроизвольную реакцию на чужую боль, но и результат осмысления ситуации, анализа положения человека и мысленной постановки себя на его место. В этом отношении сочувствие близко к пониманию...

(жалость と違って)「сочувствие」および「участие」は人に対する関係でのみ用いることができる。なぜなら、これらの感情が別の誰かの痛みへの無意識な反応のみならず、その人の状況を理解して分析し、気持ちの中でその人の立場に自分が立ってみることなどの結果でもあるからである。この点で「Сочувствие」は理解に近い感情である。

「сочувствие」のソースドメインの一つである「поддержка」は人に対してしか使えないため、そのターゲットドメインの「сочувствие」にも同じ特徴が見受けられる。以下の引用²²からも「сочувствие」という概念には「поддержка」が含まれているという Levontina の直感的な結論が読み取れる。

Для сочувствия характерна внутренняя готовность помочь, которая часто реализуется и в поведении;

「сочувствие」には、しばしば行動の中でも実現される「人を助ける」という内的な心構えがある。

Сочувствие и особенно участие обычно предполагают понимание, даже поддержку.

「сочувствие」と特に「участие」は、一般的に理解または「поддержка」とさえ思われているのである。

次は、視点を変えて、「сочувствие」には使えない「жалость」の連語を抽出し、分析してみよう。

名詞 + を бить на, в сердце пробудилась, в сердце шевельнулась, не знать, подавить, привести в, давить на, отогнать, отринуть, возыметь, преодолевать, не ведать..., почувствовать, чувствовать, ощутить, побороть в себе, трогать душу, накатилось, обуревать кого-то, раззедать (душу), раздирать, поселиться в ком-то, уколоть сердце, охватить, изводить кого-то, сдавить сердце, вырваться, налететь, накатиться, терзать, приходиться, уходить, нахлынуть, залить кого-то, забирает, разобрать кого-то, проникать, плохо скрытая, взять, ... взяла на кого-то, сотрясать, мучать

名詞+形容詞 неосознанная, большая, обильная, небольшая, брезгливая, слепая, мучительная, природная, восторженная, постыдная, нестерпимая, неодолимая, гадливая

「жалость」には「勝手に現れる」、「勝手に人を捉える」、「勝手に去る」という人間がコントロールできない特徴が読み取れる。「жалость」は「ощутить」、「чувствовать」という連語で使えるが、「сочувствие」には使えない。このことから「жалость」という概念に「чувство」（「感情」）が入っているとわかる。上記の連語のすべてがソースドメインである「чувство」にも使えて、「чувство」という言葉の用法は「жалость」という言葉の用法と性質（不合理でコントロールできない）を定義づけている。

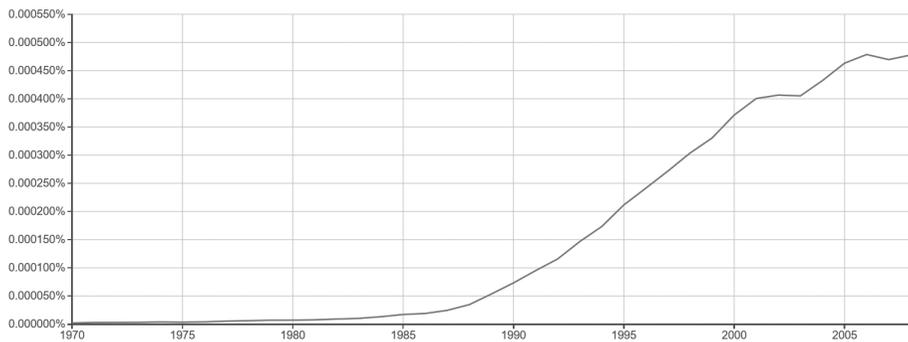
このような「жалость」の特徴は Levontina²³ の研究にも指摘されている。

Сочувствие и участие связаны скорее не с непосредственным душевным движением, а с более или менее рационально сформированным отношением к объекту. Эти синонимы не употребляются в контекстах, описывающих импульсивные и неконтролируемые реакции.

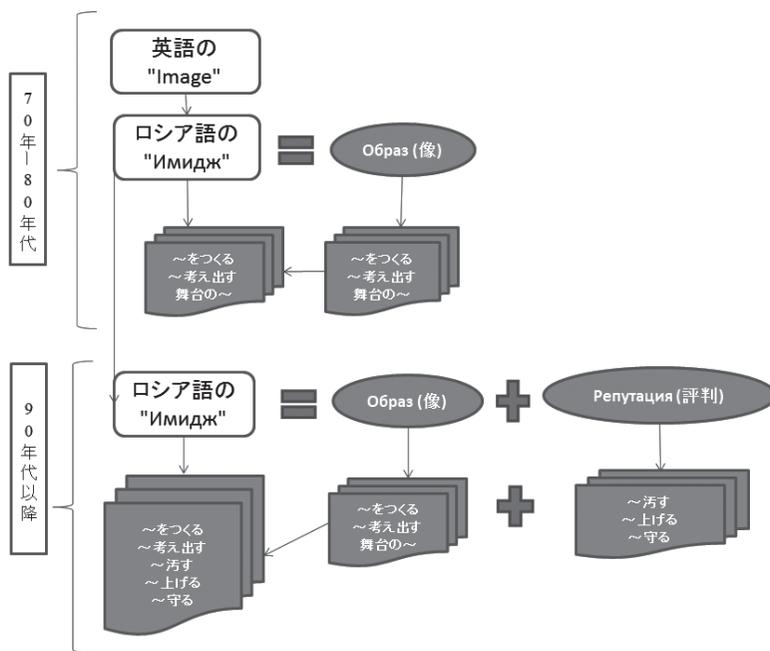
「сочувствие」と「участие」は直接的な心の動きの中での関連性を有するのではなく、対象に対して多かれ少なかれ合理的に形成された関係である。これらの類義語は、衝動的で制御不能な反応について記載された文脈の中で用いられることはない。

メタファー的連語の分析は時間とともに変化する言葉の意味まで把握できる。ことばの意味の変化は、使用頻度の高い連語の変化を辿ることで観察できる。多くの外来語の、その語が取り入れられた当初の用法を分析すると、中には現在の母語話者から見て違和感を覚えるような表現（連語）があり、外来語の意味が揺らいでいることが分かる。外来語の意味の変化と意味定着を調査する際、およその傾向を把握するために、一年ごとに言語コーパスのデータを調べる必要がある。膨大な量の本の分析結果は Google の言語分析（使用頻度）サービ

ス²⁴で紹介されており、グラフとして見る事ができる。例えば、ロシア語の“имидж”（英語の“image”に由来する）の使用頻度は以下のように表示されている。



一年ごとの連語の変化の傾向を見ると、次にあげた図のように、ロシア語の“имидж”のソースドメインは最初の10年間くらいで“образ”（像）から「“репутация”（評判）+ “Образ”（像）」に変わり、その用法もかなり変わったことが分かる。



結論

自然言語の言葉の意味（ターゲットドメイン）は、脳内において、主に他のいくつかの自然言語の言葉（ソースドメイン）によって構築され（説明され）、ソースドメインの単位はターゲットドメインよりシンプルで、従属関係のあるシステムを作っているという仮説が正しければ、メタファー的な連語を分析することによって特定の語彙にあらわれる文化や世界観を解明

することができる。連語の調査・分類・分析の手法は、抽象的な文化的キーワードの研究はもちろん、「火」のような抽象的ではない概念や類義語のニュアンス解明にまで適用できる。さらに、このような手法はネイティブな言語感覚への依存性が低いため、外国人学習者や翻訳者が効率よく使うことができると考えられる。

注

1. 土居健郎 (2007) 『「甘え」の構造』(増補普及版) 弘文堂
2. 九鬼周造 (1992) 『「いき」の構造』 岩波書店
3. 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』 岩波書店
4. 山本七平 (1997) 『「空気」の研究』 文藝春秋
5. 阿部謹也 (1995) 『「世間」とは何か』 講談社現代新書
6. 四方田犬彦 (2006) 『「かわいい」論』 ちくま新書
7. Зализняк Анна А., Левонтина И. Б., Шмелев А. Д. Ключевые идеи русской языковой картины мира: Сб. ст., — М.: Языки славянской культуры, 2005.
Шмелев А. Д. Сквозные мотивы русской языковой картины мира // Русское слово в мировой культуре. СПб., 2003.
Шмелев А. Д. «Широта русской души» // Логический анализ языка: Языки пространств. М, 2000.
Шатуновский И. Б. «Правда», «Истина», «Искренность», «Правильность» и «Ложь» // Логический анализ языка: Культурные концепты. М., 1991
Пеньковский А. Б. Радость и удовольствие в представлении русского языка // Логический анализ языка: Культурные концепты. М., 1991.
8. フォードル・チュツチェフ (1803 - 1873) の代表的な作品 (詩) のひとつ。「ロシアは頭ではわからない...」(«Умом Россию не понять...»)(1866)
9. Мокшенок В.М., Никитина Т.Г., Николаева Е.К., Большой словарь русских пословиц Москва, «ОЛМА Медиа Групп», 2010, С. 2036.
10. Wierzbicka, Anna (1997). *Understanding Cultures through their Key Words English, Russian, Polish, German, and Japanese*. New York: Oxford University Press, p.16.
11. ドストエフスキーの作品における「Вдруг」について *В.Н. Топоров* О структуре романа Достоевского в связи с архаичными схемами мифологического мышления (Преступление и наказание), *Structure of Texts and Semiotics of Culture*, ed. Jan van der Eng, The Hague, Mouton, 1973
Бочаров С. Г. «Свобода» и «счастье» в поэзии Пушкина // Проблемы поэтики и истории литературы. Саранск, 1973.
Левонтина Я. Б. «Достоевский надрыв» // Wiener Slawistischer Almanach. Bd 40, 1997.
12. 鈴木孝夫 (2003) 『ことばと文化』 岩波書店、43 頁。
13. *Группа авторов под общим руководством Ю. Д. Апресяна*, Новый объяснительный словарь синонимов русского языка, Москва; Вена: Школа Языки славянской культуры, 2003 г.
14. там же, С. 328.
15. Wierzbicka, Anna (1996). *Semantics: Primes and Universals*. New York: Oxford University Press.
16. Зализняк Анна А., Левонтина И. Б., Шмелев А. Д. Ключевые идеи русской языковой картины мира: Сб. ст., М.: Языки славянской культуры, 2005, С. 223.
17. <http://ruscorpora.ru/>
18. *О. Л. Бирюк, В. Ю. Гусев, Е. Ю. Калинина* Словарь глагольной сочетаемости непредметных имен русского языка (<http://dict.ruslang.ru>)
Денисова П. Н, Морковкина В. В. Словарь сочетаемости слов русского языка, Москва, «Русский язык»,

1983 г.

19. <http://ngrams.googlelabs.com>

20. Зализняк Анна А., Левонтина И. Б., Шмелев А. Д. Ключевые идеи русской языковой картины мира: Сб. ст. М.: Языки славянской культуры, 2005., С. 223.

Группа авторов под общим руководством Ю. Д. Апресяна, Новый объяснительный словарь синонимов русского языка, Москва; Вена: Школа Языки славянской культуры, 2003 г.

21. Новый объяснительный словарь синонимов русского языка (2003), группа авторов, Москва; Вена: Языки славянской культуры: Венский славистический альманах, 2004 г., С. 328.

22. Новый объяснительный словарь синонимов русского языка (2003), группа авторов, Москва; Вена: Языки славянской культуры: Венский славистический альманах, 2004 г., С. 329.

23. Новый объяснительный словарь синонимов русского языка (2003), группа авторов, Москва; Вена: Языки славянской культуры: Венский славистический альманах, 2004 г., С. 328.

24. <http://ngrams.googlelabs.com/>

Understanding Russian Linguistic World Image through Conceptual Metaphor (Collocations) Analysis

Viacheslav SUROVYI

In recent years multiple studies of Russian language based on linguistic relativity principle were published. A lot of them being inspired by Anna Wierzbicka works, focus on the analysis of certain vocabulary, which is considered to be a key to understanding of the Russian linguistic world image. Such keywords are usually treated as unique and hard to translate to other languages. Naturally, if speakers' world view is affected by the structure of a language to this extent, understanding or translating of Russian language cannot be based only on the information from classic dictionaries. There is a need for a tool or approach which would help non-native speakers to deeply comprehend the meaning of complicated abstract concepts of Russian language.

To resolve this issue we introduced a new collocations analysis approach, which is theoretically based on Wierzbicka Natural Semantic Metalanguage studies and the Conceptual Metaphor Theory by Lakoff and Johnson. We assume that most collocations are metaphorically motivated by the underlying conceptual metaphors, which are prior unconsciously understood by native speakers. We showed how linguistic collocations analysis may be used for studying the meaning of adopted words (имидж), synonyms differences (жалость, сочувствие), and some other words usage (огонь).